



VOL.6

医務室だより

安らぎ

発行:H28.12.12

社会福祉法人丹後大宮福祉会
特別養護老人ホーム おおみや苑



テーマ：看取りについて Part②

おおみや苑では、年に1回看取り研修会を行っています。

研修内容

- ・苑の開設当初～現在に至るまでの経過
- ・看取りの取組み内容についてのまとめ
- ・職員間での連携の大切さ
- ・看取り介護の振り返り、看取りの指針の内容についての確認



現在、看取り介護中のご家族の思いを聞かせて頂く時間も設け、改めて「看取り」について考える機会となりました。

医師：石飛幸三先生の本

苑では、看取りをする中で迷った時などに石飛幸三先生の本を参考にさせて頂いています。少し紹介をさせていただきます。

石飛先生は元々は血管外科医として病院に勤めておられましたが、特別養護老人ホーム芦戸ホームの常勤医師になられた方です。執筆やメディアを通して「老衰という自然の摂理に医療行為がどこまで必要か」と問い続け、大きな反響を呼びました。たくさん本を出版されており、どれも看取りをする上で大切なこと、ご家族の思いや実体験などが書かれています。

自然な生命力に基づいて
最期を迎えることが最高の幸せ

「主人公は誰か」を
忘れてはいけない

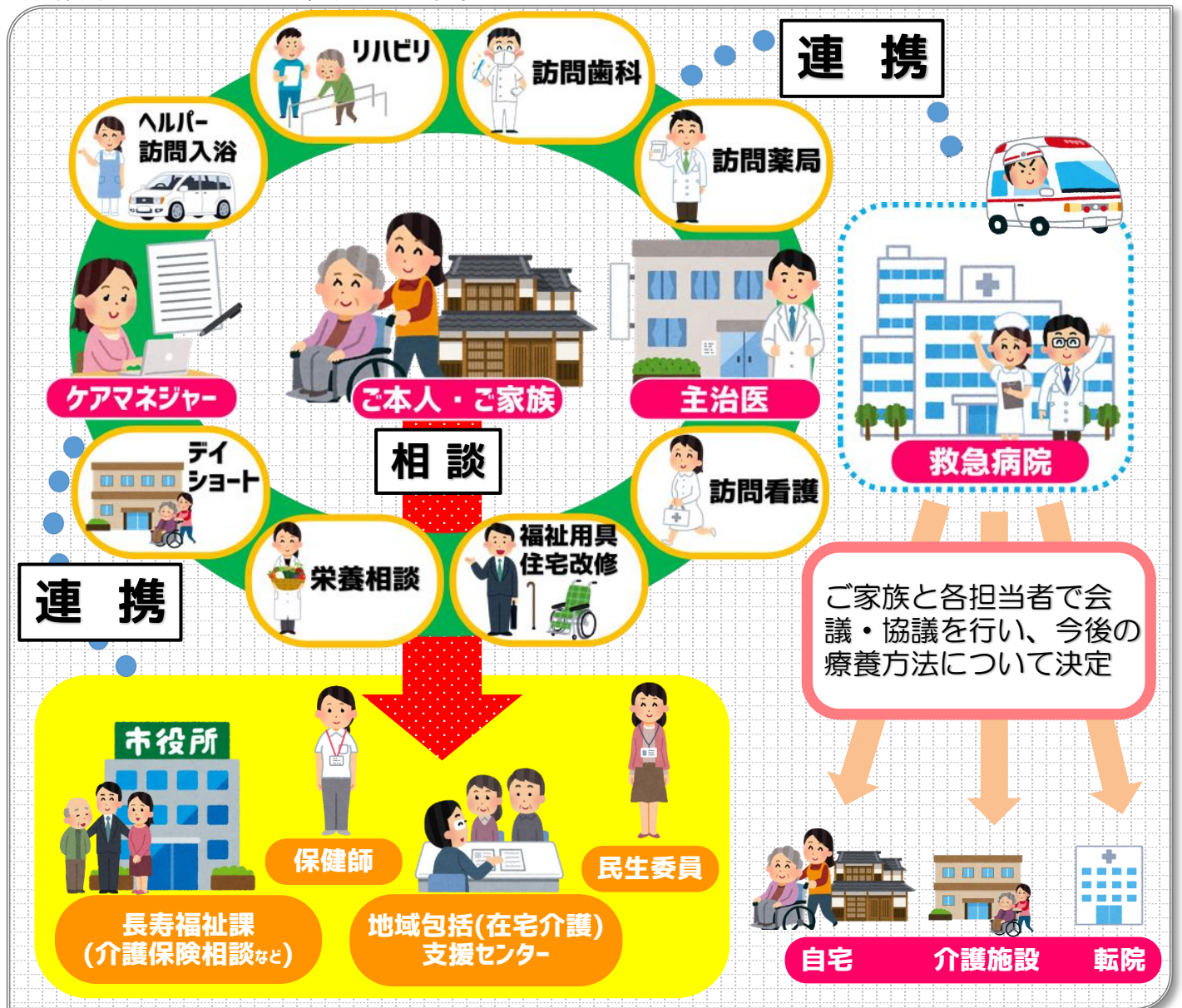
何もしない選択は
きれいな最期



永遠に
生き続ける人はいません。
人は必ず死にます。

介護をする上で
忘れないでほしいのは
1人で何もかも抱え込まない
ようにすること

「住み慣れた地域で、最期まで自分らしい暮らしを続けたい」と多くの方が望んでおられる一方で、約80%の人が病院で亡くなられているのが現状です。最期まで自宅で暮らし続けるためには、①在宅医療のしくみを知る ②療養についての意向などを家族と話しておく、ということが大切です。今回は地域の支援ネットワークを紹介します。



寝たきりなどで、通院が困難な状態であったり、治療に不安を抱えた方でも、医療関係者や介護関係者などがチームを組み、自宅での療養生活を支える仕組みが整ってきています。様々な職種が連携をとり、ご本人やご家族の意思を尊重しながら情報を共有し、安心して自宅で生活ができるように相談をしています。遠慮なく、何でも相談してみてください。

～おわりに～

誰もがいずれは老いて、衰え、終末期に入ります。多くの方は、苦痛を伴わないように平穏にいきたいものだと願っています。そのためにエンディングノートを書いて、自分の意思を家族に伝える、いわゆる終活をする人達も増えてきています。これを機に、自分自身や家族の最期の迎え方について考えてみて頂けたらと思います。